

青嶺 Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

令和七年度入学式が 挙行されました

名残の桜が舞い散る中多くの来賓をお招きして四月十日、令和七年度入学式を挙行しました。
黒川・波多津の両小学校から、計三三名の新入生を迎え、全校生徒九五名で新しいスタートを切りました。
新入生紹介での一人一人の大きな返事に感心し新たな仲間を迎え入れる喜びを実感しました。式辞では、小中で取り組んでいる「対話」の大切さと目指す学校の姿を伝えました。真剣で真つぐなまなざしで一生涯懸命に話を聞いている新入生の姿に、中学生としての自覚を強く感じ、今後が楽しみで仕方ありません。



【栗原育友会会長より】

義務教育9年間で、授業だけでなく多くのことから学び、それぞれの夢や目標に向かって頑張ってください。家庭、学校、地域の環境が皆さんを明るく素直に育んできました。この素晴らしい環境にある青嶺中学校での生活を誇りに思ってくださいと思います。
卒業生の保護者として、故郷に誇りを感じられる、心のこもったあたたかいメッセージをいただきました。

【歓迎の言葉 生徒会副会長 松下 斗真さんより】

青嶺中学校は、皆さんが思っている以上に楽しく魅力的な学校です。生徒会スローガン「plus ultra（さらに向こうへ）」を合言葉に何事にも挑戦し続け、自ら考え、意見を持ち、行動できるように一緒に頑張っていきたいと思います。一年生の皆さんと共に成長できることを楽しみにしています。

後輩の不安を一掃する、自信とおもいやりに溢れた素晴らしい歓迎の言葉でした。

【誓いの言葉 小林 莉菜さんより】

これから始まる中学校生活では、新しい出会いや学校行事に胸が高まる一方で、環境の変化や勉強と部活動の両立などの不安もあり、悩んだり立ち止まったりすることもあるかもしれません。そんな時には先生方や先輩方から時には厳しく、時には優しく助言を頂き仲間と共に支え合いながら一歩ずつ進んでいきたいと思っています。

一度しかない中学校生活を悔いのないものにするために、今、何をやるべきなのかを考え中学生としての責任と自覚を持ち、すべてにおいて全力で取り組んでいこうと思います。そして仲間との絆を深め、この三年間で最高の思い出を作っていきたいと思っています。
大きな声で丁寧にはつきりと言葉を発する堂々とした姿に、新入生の期待の大きさを感じました。

それぞれの挨拶が思いやりに溢れ、前向きな内容で温かい気持ちで満たされました。昨年も感じましたが、迎える側も、迎えられる側も全員が一生懸命に心を尽くし準備したことが伺える素晴らしい式になりました。

Pick
Up!!

毎年のことですが新学期が始まり、入学式を終え、新しい関係がまだ出来ていない4月当初は変化が大きく、妙に疲れたり、ストレスがたまったりしがちです。

そんな日々の生活で生徒たちの行動や発言でほっこりすることが多い青嶺中です。その代表は教務センター前を通る時の挨拶と手を振ってくれることです。思春期真っ只中の生徒たちですが、こちらが手を振ると「必ず」振り返ってくれます。帰りのスクールバスを見送る時もそうで、大きく手を振りながら帰っていく姿を見送りながら、職員は全員笑顔になり心がポカポカします。このやりとりは職員に安心感と元気と明日への活力を与えてくれます。

私自身も日々、何気ない言葉や行動で元気をもらっています。新しいことを実感しています。新入生からもすごい元気をもらえました。変化を前向きに捉え元気を与え合うこの一週間でした。

「再生」への道

西オーストラリア州の州都パースから車を走らせると、一時間ほどで広大な景色が広がります。

アウトバックと呼ばれるかつての不毛の大地には現在人の手が入り、牧草地として開発されています。地下水をくみ出す風車、ウインドミルが点在し、牛や羊が広大な牧場のなかで自由に暮らしています。それぞれの牧場は広大で、牛を追うのにヘリコプターを使うところもあるそうです。行けども行けども果てることがない牧草地帯を見ると、一体どれくらいの時間をかけて切り拓いたのだらうと、人間の我慢強さに感服します。

牧草地に適さなかった、開発できなかったところは荒野として、またブッシュという森として残っています。低い灌木のところもありますが、ユーカリの森も多いです。道沿いの木が黒く焼け焦げているならば、それはブッシュファイヤーという火事の跡です。落雷や強風で枝がこすれ合ったりして一旦発火すると、ユーカリの油脂に燃え移りあっという間に広がります。ある時は四国と同じ面積が焼失したそうです。

その光景は一見、すべてが焼き尽くされた荒れ野に見えます。しかし、実は焼け落ちた樹皮が肥料になりユーカリの樹皮の下には新しい樹皮が誕生し、枝には新芽が色づいています。ブッシュファイヤーは太古の昔から繰り返されてきた森の「再生」への道なのです。